

〔事例報告〕

青年海外協力隊の体育隊員における  
技術補完研修の質向上に向けた一考察  
—模擬授業の「リフレクションシート」に着目して—

白石 智也\*  
辻 翔吾\*\*  
齊藤 一彦\*  
白旗 和也\*\*\*

A Study to Improve Quality of “Technical Training” for Japan Overseas  
Cooperation Volunteers of Physical Education: Focus on “Reflection Sheet”  
in Micro-Teaching

Tomoya SHIRAIISHI

(Graduate School of Education, Hiroshima University)

Shogo TSUJI

(Japan Overseas Cooperation Volunteer: Physical Education Volunteer in Honduras)

Kazuhiko SAITO

(Graduate School of Education, Hiroshima University)

Kazuya SHIRAHATA

(Faculty of Sport Science, Nippon Sport Science University)

Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of the “reflection sheet”, which has improved, in the micro-teaching of the technical training for Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) in the field of Physical Education (PE). In addition, it aimed to obtain suggestion for improving the quality of this technical training, especially micro-teaching which is one of the programs. Therefore, 16 candidates who participated in the training inductively classified the description written on the “reflection sheet”. As a result, it was classified into 72 small categories, 29 middle categories and finally three large categories. The three large categories were named “Teacher behavior in a PE class”, “PE class preparation”, and “Preparation as JOCV”. From the results of candidates’ reflection, three perspective changes were suggested. The first is the acquisition of a perspective oriented to practice in developing countries. This is suggested by the increase in the number of descriptions considering solutions in developing countries in comparison with the previous research. The second is the acquisition of safety management a perspective in developing countries. It became possible to think about not only the general viewpoint on safety management in Japan but also from a broad perspective including the environment of developing countries. The third is the acquisition of a perspective on leaning language. It became possible to reflect also from the perspective of the language, which is one of the stress felt by Japan Overseas Cooperation Volunteers, about the PE classes.

\* 広島大学大学院教育学研究科, \*\* 青年海外協力隊体育隊員: ホンジュラス派遣, \*\*\* 日本体育大学体育学部

## 1. はじめに

近年,世界中において,開発分野におけるスポーツの価値が大きくなってきている(小林ら, 2014;岡田, 2017)。また,多くの開発途上国(以下, 途上国と略記)において, 就学率が大幅に向上しているといわれる今日(World Bank Group, 2018), それらの国々で多くの子どもたちがスポーツの恩恵を享受することができる場が, 学校の体育授業であろう。そして, 我が国は古くから途上国における学校体育の支援を実施しており, その中で最も実績があるとされているのが, 青年海外協力隊(Japan Overseas Cooperation Volunteer: 以下, JOCV と略記)である(齊藤, 2015)。JOCV 体育隊員は, 独立行政法人国際協力機構の JICA ボランティア事業において途上国に派遣されており, 50 年以上も前から, 世界中に体育の価値を広めながら, 現地の学校体育支援を行っている。JOCV として途上国に行くことを志す際, 応募できる職種は様々で, 自らの得意なことを活かした仕事を選ぶことができる。そして, 120 以上ある職種の中に, 体育という職種が存在しており, 今もなお, 多くの JOCV が体育隊員として派遣されている(川口ら, 2018)。

JOCV 体育隊員の多くは, 小学校や中学校において一体育教員として体育授業を担当することを求められたり, 体育授業の構成・運営の方法を他の教員に紹介したりする(国際協力機構, online 1)。小栗(2001)は, 途上国においては, 「学校教育の中に位置付けられている体育の認識が低く」(p. 69), また, 「カリキュラムの中に位置付けられてから」(p. 70) 日が浅いことも相まって, 体育隊員の需要が多いと述べている。加えて, そのことから, 体育隊員は, 特に指導実績や指導力の他にも体育全般にわたる業務に精通した人材が必要であると指摘されている(小栗, 2001)。

他方, JOCV では, 受入国からの要請に的確に応えるために, 実践的な技術や教授法等を事前に習得するべきであると判断された人が受ける研修として, 技術補完研修が設けられている(国際協

力機構, online 2)。体育という職種に合格した体育隊員候補生(以下, 候補生と略記)においては, 主に実務経験を持たない候補生を対象に実施されており, 指導実績の少なさを補完するための研修が組まれている。そして, そのプログラムの中には, 途上国の体育事情を学習する講義に加えて, 授業を作り候補生同士で実践し合う「模擬授業」が位置付けられている。模擬授業とは, 「授業の組み立て方や指導法などを体験的に学んだり検討したりするために, 実際の授業を想定した場で実践を模して行う授業」(木内, 2004, p. 506)のことを指す。そして, 体育科における模擬授業の意義として, 大友(2002)は, 実際の体育教師の役割を経験することを通して, 「授業実践上の問題解決能力を育成する」(p. 257)ことや, 「体育科教育学の理論を理解する」(p. 257)ことなどを挙げている。

加えて, 体育科教員養成段階における模擬授業では, 「リフレクションシート」が「リフレクション」を促すためのツールとして多く用いられている(e.g., 岩田ら, 2010; 木山, 2016)。その中で, 岩田ら(2010)は, 「リフレクションシート」を用いて体育の「リフレクション」の焦点化のサポートを行うことは, 段階に応じた有意義な方法であると述べ, 独自の「リフレクションシート」を開発した。そして, 川口ら(2018)は, 岩田ら(2010)が開発した「リフレクションシート」を用いた実践を, JOCV 体育隊員の技術補完研修内において行っている。結果として, 候補生が未だ経験していない途上国での実践について思考することは難しく, 「リフレクションシート」に記された記述の中で, 「途上国で実践を行うという前提に立って解決策を思考しているもの」(川口ら, 2018, p. 26)は, 非常に少なかったという。これでは, JOCV 体育隊員の技術補完研修において実施される模擬授業であるにも関わらず, その有すべき意義が希薄になるため, 「リフレクションシート」の中に, 途上国での実践を想定できるような記述欄を設けることを改善策の1つとして挙げている(川口ら, 2018)。しかも, そのような改善が講じ

られれば、「リフレクション」の視点の広がりだけでなく、途上国の体育施設や用具、子どもの実態などの理解に役立つことを主張している。しかしながら、そのような指摘を踏まえた上での実践や研究は管見の限り見当たらず、JOCV 体育隊員の技術補完研修における模擬授業に適した「リフレクションシート」に関する研究は、未だ蓄積が浅い状態である。

そこで本研究では、川口ら（2018）が実際に使用した「リフレクションシート」を改良した上で模擬授業の実践を行い、改良された「リフレクションシート」の効果を検討することを目的とした。なお、本研究が、JOCV 体育隊員の技術補完研修、とりわけ、プログラムの1つである「模擬授業」の質向上に資することも目的とする。

## 2. 方法

### 2.1. 調査時期及び調査対象

調査時期は、JOCV 体育隊員の技術補完研修が実施された2018年9月3日から9月5日の3日間であった。調査対象は、2018年度3・4次隊として派遣予定で本研修に参加していた候補生16名であった。表1は、今回の技術補完研修の日程を示している。

### 2.2. 調査内容及び調査方法

調査内容は、候補生が本研修の模擬授業を実施した際に、「リフレクション」した記述内容とした。本研修の最終日に行われた模擬授業は、以下のような進行の仕方で行われた。

まず、前日の段階で16名を4人ずつの4グループに分け、各グループ40分間の模擬授業を構成した。当日は、各グループの模擬授業後に20分程度の授業検討会を設け、全ての班の模擬授業及び授業検討会終了後、自分たちの模擬授業を「リフレクション」するために、「リフレクションシート」を記入した。模擬授業後の授業検討会は、授業者である候補生4名がそれぞれの反省を述べた後、生徒役であった数名の候補生が授業に対しコメントし、最後に講師のX氏が助言をするという形であった。概要は、表2に示している。なお、候補生が派遣国で使用する言語は国によって異なるため、JOCV 体育隊員の技術補完研修において言語の学習は意図されておらず、模擬授業も全て日本語で行われた。

本研究において改良した「リフレクションシート」（図1）は、川口ら（2018）が実際に用いた「リフレクションシート」に、「現地での想定」という行を付け加えたものであった。なお、事前に本研修の責任者に、本研究の趣旨を十分に説明した上で、調査の許可を得た。また、対象者である候

<表1 2018年度3・4次隊の体育隊員候補生の技術補完研修の日程と内容>

日付	プログラム名	主な内容
9月3日 (1日目)	体育隊員派遣の意義	体育の派遣の必要性・活動展開・安全指導
	日本の体育科教育	最近の体育科教育の動向・日本の体育科教育システム
	体育科教育の教材構成・評価	体育科教育の教材構成について・授業評価のポイント
	体力調査	体力測定実施についての要点・統計処理の仕方
9月4日 (2日目)	イベント開催	イベントを開催するにあたっての要点
	派遣国の現状と活動報告 (元JOCV2名からの経験談)	派遣国の現状・活動成果・問題点・今後の課題
	世界の体育科教育	海外の体育科教育・スポーツ開発教育の現状と動向
	学習指導案作成	学習指導案の作成の仕方・ポイント
9月5日 (3日目)	模擬授業	模擬授業・授業検討会
	研修のまとめ	研修のまとめと振り返り

	事実と評価	原因（要因）	改善策
授業展開 (スムーズな流れ, 時間配分, 移動の仕方など)			
教師行動 (観察の場所, 言葉かけ, 示範, 声の大きさなど)			
教材 (ゲームの工夫, 用具の工夫, 学習内容の明確化など)			
場の工夫 (用具の配置, 練習の場所, 安全確保など)			
現地での想定 (教具の数, 人数の工夫, 現地語での説明など)			

<図1 本研究で使用した「リフレクションシート」の様式>

<表2 本研修内のプログラム「模擬授業」の進行方法>

時間	領域【授業者】
1	球技（ネット型）【A, B, C, D】
	授業検討会①
2	ダンス【E, F, G, H】
	授業検討会②
3	体づくり運動【I, J, K, L】
	授業検討会③
4	器械運動（マット運動）【M, N, O, P】
	授業検討会④
5	全体の総括・振り返り

補生に対しても、本調査への参加の有無は自由であり、その有無によって研修の評価には一切の影響がない旨を伝えた上で、全員から調査協力の同意を得た。

### 2.3. 分析の手続き

川口ら（2018）と同様に、「リフレクションシート」の「改善策」の列に書かれた自由記述部分を対象に、KJ法（川喜田, 1986）を援用し分析を行った。「改善策」の記述を対象とした理由について、川口ら（2018）は、木原ら（2007）の考えに依拠しながら、「教師が問題に直面した時にそれまでの経験や自身の実践的知識を駆使して試行錯誤する問題解決的な思考」（川口ら, 2018, p. 23）こそが「リフレクション」と解釈しているからである。

まず、記述を小・中・大カテゴリーの順に分類し、抽象化を行った。その後、それぞれのカテゴリー間の繋がりから導き出される考察に関して、最終的に、理論的な矛盾やデータの解釈の逸脱がないと判断されたものに関して、文章として整理することとした。

なお、本研究で使用した「リフレクションシート」の作成と、分析については、内的妥当性を高めるために、筆者の他に、体育科教育学を専門としている大学教員2名によって、それぞれの解釈が収束する地点を模索する「トライアングレーション」（メリアム, 2004, pp. 297-298）を実施した。筆者及び大学教員1名は、JOCV経験者であることに加え、大学教員2名は、両者ともJOCV体育隊員の技術補完研修の講師を務めた経験があることを考慮し、その信頼性を担保した。

## 3. 結果

分析対象とした記述数は139個であった。それらを帰納的に分類した結果、72個の小カテゴリーに分類された。さらに、29個の中カテゴリー、最終的に3つの大カテゴリーに分類された。3つの大カテゴリーは、それぞれ「授業中の教師行動」（記述数：73個）、「授業準備」（記述数：51個）、「JOCV体育隊員としての準備」（記述数：15個）であった。表3、表4及び表5は、それぞれの大カテゴリーにおける分類結果の詳細とその記述例を示したものである。

<表3 大カテゴリー「授業中の教師行動」における記述の分類とその記述例>

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー（記述の個数）	記述例	
授業中の 教師行動	安全管理	安全管理の周知（3）	始めに安全についてもっと言うておく。	
		安全管理のための場の設定（3）	今回は2面だが場合によっては1面で、安全第一で行う。	
		スペースの活用（5）	時間を割り当てて場所を共有する。	
	ルール	教材のルールの共通理解（2）	活動前にルールのポイントを確認する。	
		授業のルール説明（2）	授業での決まりや規則を子供達に理解させる。	
	目標・ 課題	授業の目標の伝え方（1）	本時のポイントをこまめに伝えることで、達成すべき目標を意識して活動することができる。	
		課題の共有（1）	対極の動きができないペアを見つけて、「どうして困った？」と、みんなの課題にする。	
	指示・ 説明	児童生徒への指示の明確化（2）	動きや説明をする際にはしっかりと注目させる。話を聞く姿勢を作れるように呼びかけをする。	
		説明の声の大きさ（2）	声のメリハリによる効果を知る。	
		説明の要約（2）	要点を絞り、短く、的確に伝えるようにする。	
		ノンバーバルな指導の重要性（1）	バーバルに頼らない。ボディで伝える。	
	師範・ 示範	示範の重要性（1）	子供を手本にする。	
		示範の明確化（2）	台上などの高い位置で示範する。	
		師範の仕方（2）	大きさに見本や例を示してみる。	
		師範の頻度（1）	指示+実演という部分を増やす。	
	発問	発問の内容（1）	常にテーマを絡めて発問する。	
		発問のバリエーション（1）	発問の種類を増やしておく。	
		発問のタイミング（1）	発問の際は我慢、ヒントを出す。	
			教師の立ち位置（6）	流れを想定して、立ち位置などを考える。
			タイムマネジメント（2）	人数が多くなったときに道具の配布・回収を素早くする必要があるので、並び方を工夫する。
	用具・ 教具		用具の配布の仕方（1）	教師が列の最初の人にまとめて渡すなどの工夫があると全員が一斉に取りにいて混雑することがなくなる。
			用具を用いないための工夫（2）	ある用具で工夫する、用具が無くてもできる活動をする。
			用具の用い方及び指示（5）	順番に使わせる。
			ワークシートの活用（2）	ワークシートを使って考える時間を増やす。
			用具の設置位置（1）	道具の配置を効率良く行う。
	声かけ		声かけの仕方（5）	活動中でも全体やグループに声をかけて指示する。
			声かけの頻度（1）	言葉かけを常に行う。
			称賛の仕方（2）	生徒を褒めることでさらに盛り上がったのではないかな。
			個別指導の時間（1）	丁寧に、時間の許す限り接する。
			臨機応変な対応（2）	もし不具合が生じたときに臨機応変に対応できる力。
			活動形態の限定（1）	グループ、ペア活動のみ行う。
	児童生徒 の実態		児童生徒の状況把握（3）	まずは子供たちの状況をしっかり理解する。
			児童生徒の役割（1）	生徒に役割を与える。
		児童生徒の呼び方（3）	1人1人の子供達は名前と呼ぶ。	
その他		精神面（1）	頑張る。	
		教師も楽しむことの重要性（1）	まずは自分自身が体育を楽しむ。	



<表4 大カテゴリー「授業準備」における記述の分類とその記述例>

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー（記述の個数）	記述例
授業準備	教材の工夫	ゲーム要素の導入（1）	ゲーム（遊び）の要素を取り入れる。
		音楽の活用（1）	音楽を使ってリズムを取り入れる。
		授業のつながり（2）	導入までの展開をスムーズに行うためにメインの内容に合わせたものを行うべきだった。
		つまずきの予想（1）	あらかじめつまずきそうなポイントを予想しておく。
	授業形態	TTの共通理解（2）	説明の仕方を統一する。
		TTの授業前の話し合い（2）	誰が何を準備するのか話し合っておく必要があった。
		TTの役割分担（1）	2人ペアで交代し、運動していないほうがアドバイス役をするなどの工夫がある。
	安全管理	事前の安全管理（1）	自分自身が実演して安全を確かめる。
		安全管理のための環境整備（1）	安全確保をしっかりとて、グラウンドや用具を整備する。
		事前のシミュレーション（8）	頭の中で、または友人同士でアウトプットするなどする。
		活動の適量化（1）	活動内容を減らして、1つあたりの活動時間を増やす。
	授業の目標・課題の設定	課題設定の重要性（1）	課題設定により重点を置く。
		スモールステップの設定（2）	スモールステップで課題に取り組みやすいようにする。
		児童生徒の発達段階を意識した課題設定（1）	小6の内容としては、テーマについて考え直し、身近なものをデフォルメし、テーマを与える。
		教師自身に対する目標の明確化（1）	何を達成、意識しながらその授業を行っているかをしっかり頭に入れ、目標がぼやけないように芯を持つこと。
		目標内容に沿った活動内容の設定（2）	目標を達成するための順序立ては絶対に間違えてはいけない。
		児童生徒に対する目標の明確化（3）	授業の最初と最後で記録の測定をするなど、教師にも児童にもわかりやすい目標を設定する。
	指示・説明・師範	師範のバリエーション（1）	教師ができる動きを増やす。
		説明の具体性（2）	授業で何をどのように伝えるのか準備段階で書き出す。
		伝える内容や話す内容の整理（1）	伝える内容な話す内容を整理し、板書しておくなどする。
	教材・教具	視覚教材の導入（3）	画像・動画を使っても良い。
		教材研究の重要性（2）	授業を行う前に教材研究を行うこと。
		教材の選定（2）	そのときに合った教材を取り上げるべき。
		教材のバリエーション（2）	多くの授業を見学させてもらいバリエーションを増やす。
		教材のルール設定（1）	色々な状況を想定してルールを考えること。
		用具・教具の作成（5）	使えるものを集めて作成する。
	その他	授業中楽しむための準備（1）	また楽しむためにも準備で抜かりのないようにする。

<表5 大カテゴリー「JOCV 体育隊員としての準備」における記述の分類とその記述例>

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー（記述の個数）	記述例
JOCV 体育隊員 としての 準備	現地教員 との関係	現地教員との コミュニケーション（1）	現地の先生やスタッフとコミュニケーションを取る。
		現地教員との授業の実施（1）	カウンターパートと協力して授業を実施する。
	現地で 授業を 実施する ための 準備	ボキャブラリーの重要性（1）	ボキャブラリーを増やす。
		言語の学習（2）	自分が感じた通りの想いをしっかりアドバイスとして子供達に伝えるために、しっかり言語の事前学習をする。
		現地の児童生徒の実態把握（1）	まず、生徒の実態を見極める。
		現地の教具の活用（1）	別の方法、現地にあるものを利用する。
		児童生徒の名前を呼ぶ余裕（1）	子どもたちの名前を人数が多くても呼べるように余裕を持って行う。
		現地の環境の把握（6）	現地のグラウンド、または体育館の状況を把握し、用具の状態等を確認した上でどれだけ自分の思い描くものに近づけるかという工夫と準備が必要である。
		環境に適応できる柔軟性（1）	どんな環境でも工夫できる柔軟性を持つ。

## 4. 考察

### 4.1. 途上国での実践を志向した視点の獲得

川口ら（2018）の先行研究の中で、「途上国で実践を行うという前提に立って解決策を思考している」（p. 26）と考えられる記述は、全44個中2個（4.5%）しかなかったと述べられている。一方、本研究においては、139個中19個（13.7%）にまで増えた。本研修に参加した候補生は16名であり、川口ら（2018）が対象とした11名と比べると増加している。また、「現地での想定」行が付け加えられたことも相まって、分析対象となった記述数も、川口ら（2018）の44個から大幅に増加し、本研究では139個となった。そのため、単純な比較はできないものの、その割合を鑑みると、これは大きな変化であると捉えることができるであろう。

他方、「現地での想定」行に書かれた記述は29個であった。大カテゴリー「JOCV 体育隊員としての準備」に分類された記述が15個であり、「現地での想定」行に書かれた約半数の記述は、大カテゴリー「授業中の教師行動」や「授業準備」に分類されていることがわかる。それを踏まえると、多くの候補生が、途上国での実践を思考しながらも、「授業中の教師行動」や「授業準備」につい

て「リフレクション」を行っていたということが窺える。また、大カテゴリー「JOCV 体育隊員としての準備」に分類された15個の記述のうち、過半数となる8個は、他の行で記された記述であった。これらのことから、「現地での想定」行を追加したことは、川口ら（2018）が提案するような、途上国での実践を想定した視点の広がりに影響を及ぼしていたといえるであろう。

一方、本研修の模擬授業における設定として、途上国での実践を想定して行うものなのか、もしくは日本における体育授業を行うものかについて、事前に明言されていなかった。そのため、途上国を想定した模擬授業を行うのか、それとも、振り返りの際でのみ途上国のことを想定するのかなど、ポイントを絞った上で模擬授業を運営することで、この視点はより深まると考えられる。

### 4.2. 途上国における安全管理の視点の獲得

教員養成課程における模擬授業の先行研究の中でも、岩田ら（2010）の研究では、「安全・怪我」というカテゴリーが、また、木山（2016）の研究では、「学習環境（安全）」というカテゴリーが生成されている。つまり、模擬授業における「リフレクション」の視点としては「安全」が共通項の1つであるといえる。これら体育授業における安

全の視点について、日本においては場の設定や用具の工夫を思い浮かべることが多い。一方、木村(2015)は、途上国における体育の主な問題点の1つとして、スポーツを行う環境や施設が正しく整備されておらず、老朽化していることを挙げている。本研究においては、大カテゴリー「授業中の教師行動」及び「授業準備」の中にも、安全管理に関わる小カテゴリーは生成された。これらは、日本においても一般的な安全管理に関する記述で構成された小カテゴリーである。しかし、大カテゴリー「JOCV 体育隊員としての準備」の中にも、「現地の環境の把握」という小カテゴリーが生成されている。これは、まさしく木村(2015)が指摘する途上国の環境について思考ができていたことが表れている。

また、中村・鈴木(2016)によると、教員経験が浅ければ浅いほど、体育授業において安全配慮ができる事項が少なく、その中でも、用具の工夫を重視した安全配慮に最も重点を置く教員が多い傾向があるという。これは、本研修に参加している実務経験がない候補生にも同じことがいえると考えられる。しかし、本研究では、用具や教具に関する工夫だけでなく、場の設定や声かけ、活動形態など、多角的な視点から安全について「リフレクション」されており、安全配慮事項が少ないとは言いがたい。このことから、「現地での想定」行を付け加えることで、木村(2015)の指摘も含めた幅広い視点から安全管理について考えることができるようになった可能性があるといえるであろう。ただ、この点に関しては、川口ら(2018)との比較を行うことができないため、「現地での想定」行を付け加えたことによる影響と断言することは難しい。

#### 4.3. 言語習得に関する視点の獲得

大カテゴリー「JOCV 体育隊員としての準備」の中には、小カテゴリー「言語の学習」や「ボキャブラリーの重要性」など、言語に直接的に関わる記述で構成された小カテゴリーが生成されている。川口ら(2018)の先行研究において、このよ

うなカテゴリーは生成されておらず、「現地での想定」を踏まえた「リフレクション」の結果であるといえるであろう。

他方、川口ら(2018)の研究でも、「フィードバック」や「説明」など、言葉を介さなければ改善することが不可能なカテゴリーは生成されていた。これは、体育授業における「リフレクション」においては当然の事象ではある。しかし、そのことについて異なる言語で行うことを考えてみると、多くの体育教員にとっては、非常に困難を有する問題に変わるであろう。本研究においても、全小カテゴリー72個のうち、「授業のルール説明」や「発問の内容」、「声かけの仕方」など、言葉を介さなければ改善することができないと考えられる小カテゴリーは、合計27個生成されていた。加藤ら(2004)によると、JOCVが現地で感じるストレスの1つに「言語」という問題があると述べられている。使用言語が異なる国に派遣される候補生が集まる技術補完研修においては、言語習得を目的にしたプログラムを組むことは難しく、模擬授業も日本語で実施されている。しかしながら、川口ら(2018)と比較すると、直接的、間接的問わず、言語に関する「リフレクション」が多くなされていた。この点は、「リフレクションシート」を改良した1つの成果といえるのではないであろうか。

## 5. おわりに

本研究では、JOCV 体育隊員が技術補完研修内で実施する模擬授業において、先行研究で指摘された課題を解消するために、途上国での実践を想定することができるように改良した「リフレクションシート」を使用し、その効果を検討した。本研究の成果として、大きく以下の2点が挙げられるであろう。

- (1) 途上国における実践の想定のみならず、安全管理や言語習得などに関しても、「リフレクション」の視点の広がりが見られるということが明らかになった。
- (2) JOCV 体育隊員の技術補完研修における目



的に即した「リフレクションシート」の改良から、(1)の成果が得られたことに伴い、対象者が持つ目的に応じた「リフレクションシート」の改良が有効である可能性が高いということが明らかになった。

一方、本研究の課題としては、調査対象者の少なさや、「リフレクション」が個人の実践に留まっている点などが挙げられる。また、川口ら(2018)の指摘と同様、「リフレクションシート」を記入したのが全ての模擬授業終了後であり、他のグループの模擬授業や講師の助言などが「リフレクション」を促した可能性も大いに考えられる。これらは、研修プログラムの都合上、本研究の限界となる部分であるといえる。しかしながら、この実践が、実際に現地で役立ったかどうか、縦断的な調査を実施することで、本研究の新たな可能性を見出すことができると考えられる。本研究が、JOCV 体育隊員の技術補完研修の質向上に資するために、そのような縦断的な視点及びより多くの実践を積み重ねる必要がある。

## 文献

岩田昌太郎・久保研二・嘉数健悟・竹内俊介・二宮亜紀子(2010) 教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討—「リフレクション」を促すためのシート開発—. 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部, 59: 329-336.

加藤章子・土井由利子・筒井末春・牧野真理子(2004) 青年海外協力隊員の職業性ストレス—職業性ストレス簡易調査票を用いて—. 産業衛生学雑誌, 46: 191-200.

川喜田二郎(1986) KJ法:混沌をして語らしめる. 中央公論社:東京.

川口諒・明石智・齊藤一彦・白旗和也(2018) 青年海外協力隊体育隊員候補生の「リフレクション」の実態に関する事例研究—技術補完研修における模擬授業に着目して—. 広島体育学研究, 44: 19-27.

木原成一郎・村井潤・坂田行平・松田泰定(2007) 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意

義に関する事例研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 56: 85-91.

木村寿一(2015) 教育とスポーツ I. 齊藤一彦ほか編. スポーツと国際協力学スポーツに秘められた豊かな可能性—. 大修館書店:東京, pp. 92-114.

木内剛(2004) 大学教育と教師の力量形成: 模擬授業. 日本教育方法学会編. 現代教育方法事典. 図書文化社:東京, p. 506.

木山慶子(2016) 教員養成における模擬授業の学習成果の検討—学生による授業分析を用いた省察から—. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 51: 83-93.

小林勉・関根正敏・今村貴幸・野口京子・小山さなえ・布目靖則・早川宏子(2014) 国際貢献に傾くスポーツの世界的潮流—国連による「スポーツ・体育の国際年」の展開とその成果—. 中央大学保健体育研究所紀要, 32: 137-160.

国際協力機構 (online 1) 「体育」隊員とは?. [https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/job\\_info/physical\\_education/](https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/job_info/physical_education/), (参照日: 2019年7月8日).

国際協力機構 (online 2) 技術補完研修【一般案件】. [https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/training/skill\\_complement.html](https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/training/skill_complement.html), (参照日: 2019年7月8日).

メリアム・堀薫夫ほか訳(2004) 質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー—. ミネルヴァ書房:京都.

中村有希・鈴木直樹(2016) 小学校教師の体育授業における安全配慮の特徴—教師の発達段階に着目して—. 東京学芸大学紀要, 68: 165-173.

岡田千あき(2017) 貧困削減に向けたスポーツの活用に関する一考察. 人間福祉学研究, 10(1): 67-78.

小栗俊之(2001) 国際ボランティア団体・青年海外協力隊に関する研究—スポーツ部門における現状と課題—. 文京学院大学研究紀要, 3: 159-77.

大友智(2002) 模擬授業の意義と進め方. 高橋健

夫編 体育科教育学入門. 大修館書店：東京,  
pp. 256-266.

齊藤一彦 (2015) ODA によるスポーツを通じた  
国際協力. 齊藤一彦ほか編. スポーツと国  
際協力—スポーツに秘められた豊かな可能性—.  
大修館書店：東京, pp. 41-61.

田井健太郎・河合史菜・元嶋菜美香・久保田もか・  
高橋浩二・宮良俊行 (2018) 教員養成課程にお  
ける模擬授業の省察に関する研究. 長崎国際大  
学論叢, 18 : 31-46.

World Bank Group (2018) World Development  
Report: Learning to Realize Education's  
Promise. International Bank for  
Reconstruction and Development / The  
World Bank: Washington DC.